

晦の夜に

白洲穂澄

重々しく鐘が鳴り渡る。浜辺を濡らした白波が、束の間跡を留めて真砂まさごに消えるようにして、音響は雲間へと吸い込まれた。

星のない夜である。厚く連なり天蓋てんがいをなす雲が、悠久の瞬きを覆い隠し、その代わりとばかりに白雪でもって闇天あんてんを賑わす。

雪は道々に降り積もり、ひび割れ薄汚れたアスファルトの路面を、この時を迎えるに相応しい装いへと塗り変えている。老人ばかりの住宅街だけに、夜になって降り積もった雪に無粋な轍が刻まれることもなく、まさしく正装といった趣である。

いつもならこの塀の上に猫がいるのに。そんなことを思いつながら、彼女は歩みを進めた。

息が、白い。駅から徒歩十数分。耳は赤く、冷え切った感覚がない。頬も仄かに染まり、石になったように固まっている。染み込んだ水に体温を奪われて、もはや足先には

痛みすら覚える。雪が降る、などとは予想していなかったのだ。当然、傘は持っておらず、頭の上にはうっすらと雪が積もっている。

コートコートの襟で持ち上げられ、膨らみを帯びた髪の間を晦の冷気が吹き抜けた。

「……………」

微かな声と共に吐き出された吐息は白く染まり、彼女の頬を撫でつつ立ち上った。雪越しにヒールが道を打ち鳴らす規則的な音だけが刻々と時を告げる。

帰ったら年越し蕎麦。外から帰って来て冷え切った体。絶妙の茹で具合で差し出される出来立ての蕎麦。出汁の豊かな香りをかすかに伴って立ち上る湯気。ひとたび啜れば口腔に充滿して有り余る蕎麦の風味が鼻孔にまで及び、食道を温めつつ緩やかに胃へと落ちる。

そこに合わせるのは上爛の日本酒。日本酒を愛してやまないわけではないけど、やっぱり大晦日は和風で行かないと。この際大事なのは酒の味よりもむしろ、酒によって醸し出される雰囲気。今年一年の出来事を振り返りつつ、しみじみと語らいお猪口を傾ける。

向かいには少し疲れたような表情の彼氏。十人並みの顔で背も普通。別に頼れるわけではないけど、なんだか落ち着く。彼はあまりお酒が強くないから、すぐに頬が赤くなる。目つきもだんだんトロンとしてきて、少しく愚痴を言ったかと思うと、やがて臉が下りてくる。すぐにコクリコクリと首が上下しはじめ、一〇分少々で全身が緩み、机に突っ伏して穏やかな寢息を立て始める。そんな彼が風邪をひかないようにと、そっと毛布を掛け……。

そこまで妄想して、彼女はふと我に返った。男日照りの——いわゆる「喪女」としての——時間が長すぎたのか、気を抜くといついついそういう妄想に走ってしまう。

でも、頻度こそ激増したけど、内容は随分と丸くなつたし、と内心言い訳をする。すでに彼女は、「壬子様」なる幻想には三下り半を叩き付けている。いや、あるいは叩き付けられたのかもしれない。ともかく、今は人の身に相応しい幸せを、健全な肉体に健全な魂が宿るようにと祈る程度の、ごくごくありきたりな幸せを望んでいる。

それなのに、なぜ！ と、人の身に余る怒りを覚えずにはいられない。古代には、このような考え方があったら

しい。運命の女神は前髪しか持たない」。もはや運命の女神は彼女の前を通り過ぎてしまったのだろう。

大学に入学したのはもはや遠い記憶で、今は二度目の一年生。ギリシャ・ローマの至高の恋愛談——例えば、アポロンとヒュアキントスの悲恋、あるいはゼウスとガニュメデスの歳の差の愛——にのめり込むうちに、終ぞ異性と無縁な四年間を過ごしてしまった。

去年は愉快な年末だった。就活に難航した西洋古典を嗜む同志が必死に卒論を仕上げているところを高みの見物とばかりに煽りに煽り、優雅に帰省して、歳の離れた従姉妹に至上の愛についての英才教育を施していたのだから。それが今年はどうだ。大晦日までバイト。朝から晩までバイト。帰れば冷え切った暗い部屋が迎えてくれる。なんと不毛な年末だろう。

はあ……首吊りたい」
どす黒い言葉を投げ捨てて、彼女は歩みを進めた。

公園に差し掛かった。家まであと数分である。
帰ったら蕎麦。帰ったら酒。帰ったらこたつ。帰ったら

紅白。

お題目のように脳内で繰り返しつつ、彼女はちらりと公園に目をやった。いつもなら、夜更けに猫たちが集まって、なにやら会議でもしているかのように額を突き合わせているのだが。

「ない……」

やはりこの雪で会議は延期になったようだ。猫はこたつで丸くなる生き物なのだ。ならしかし、一体このような荒天時に猫たちはどこに消えるのだろうか。

ぼんやりとそのような取り留めもないことを考え始めたところで、視界の端に違和感を覚えた。

何かが、いる。

正確には、何者か、という方が適切か。

それは、人のような姿をしていた。

しかし、彼女はそれを直ちに人と認められなかった。

明らかに、その者は異様なのである。

薄い着物のみを纏い、雪風に舞う白髪は豊かにして軽やか。色彩、存在感、すべてが消え入りそうなほど希薄でありながら、しかし、それにもかかわらず、強烈な存在感をもって視界に存在していた。

虚ろなその男は、普段は猫たちのドンが坐すベンチに腰掛け、雪の積もりゆく様を眺めていた。

ひっ……！」

何かが、彼女の足に触れた。猿である。まだ幼く、雪玉と見紛うばかりの純白の矮躯。雪に肘まで埋もれてひよこひよこと歩くその姿は、雪の夜には心許ない。

と、彼女が猿に気を取られている間に、虚ろな男は顔を彼女の方へ向けていた。ごく小さな悲鳴を聞き取ったのであろう。

目が合った。その瞳は、公園の入り口から視認するには、あまりにも小さかった。しかし、眼窩の影の奥にある、色もわからないその瞳と自らの視線がぶつかっている事だけは、なぜだか認識できた。

『……………』

口元の影が蠢いた。何事かを呟いたらしいが、両者の間に吹く寒風がその声を運び去った。

動くに動けず立ちすくむ彼女が少し視線を落とすと、幼猿と目が合った。幼猿は甲高い声で鳴き、数歩前進し、再び彼女を振り返った。

獸に理性など望むべくもないだろうが、その理知的な瞳は、自分に付いて来るように、と雄弁に語っているように思えた。

去ることもできず、かといってそのまま立ち続けるわけにもいかず、彼女は躊躇いがちにその幼猿に従った。誘われたのは、怪男子の真正面だった。

貴女には、私が見えているのですか」

読経に従う木魚の音のように淡々として、硬と軟の境界あわいに響くような声音で問うた。彼女へと注がれる眼差しは、どこか茫洋として覇気がない。

それは僥倖」

やはり虚ろな声調で、彼は喜びの言葉を述べた。

最後に地上の子と言葉を交わせるとは、思ってもみませんでした」

それ以降、彼は彼女を見つめたまま沈黙した。

あの、寒くないんですか。雪、積もってますけど……」

いたたまれなくなって彼女は口を開いた。

冬は寒く、雪は冷たいものです」

「つまり、寒いと」

「え、寒さは私にとって意味をなしません。というのも、私の体はそのような快・不快を感じないからです」

えっと……」

そして、私の地上での命は間もなく途絶えるでしょう。

従って、貴女が気にすることはありません」

じゃあそんな訳にいかないでしょ」

彼女はやや語気を強めて言った。

あなた、服は？ ていうか、家は？」

服なら着ていますし、家ならありません。というのも、私は今日であらゆる家から追い出されることになっていきますから」

えっと、つまり、ホームレス？ 大家さんに追い出された？」

男は若く、その見た目からしてひよっとすると、フリーターか、あるいは何やら特殊な仕事で日々の糧を得ているのかもしれない。そうすると、収入が途絶えて家を追い出されることもありうるだろう。あるいは、恋人なり奥さんなりと喧嘩して、締め出されたのかもしれない。見れば、確かに甲斐性のなさそうな風貌をしている。

どちらにせよ、このような情報からは好人物であるとは言い難い。

「方では正しく、他方では間違っています。私が家を持たないのは、そのような世俗的な事柄によるのではなく、より神聖な取り決めによっているのです」

「……………」

さすがに彼女も、この男から何か危険な雰囲気を感じ始めていた。ここまで真顔で厨二病じみた、なにか異次元の電波を受信したような言動をできるといのは尋常ではない。

何か精神系の疾患でもあるのかもしれない。彼女はどのように考えてその場を立ち去ろうとする。

しかし、一歩足を後ろに引くと、件の幼猿がキッと甲高い声で鳴き、その足に蛇が絡みつくようにして駆け上った。

「ひっ、や、やめなさい！」

申はあなたが気に入ったようです。誰にも姿を認めてもらえず寂しかったのでしよう」

「、知らないわよ。こら、降りなさい！」

申、まず手始めに、この人の家にも宿ってみてはどうでしょう？」

「ちよ、何を勝手に……………」

彼女がそう反駁するよりも速く、申は彼女の肩の上で飛び跳ねつつ甲高い鳴き声を上げた。

こんな真冬に薄着で猿を連れて公園のベンチに座っているような人間は、先ほども言った通りまともではない。精神に異常をきたしている変質者の類か、あるいは殺人者かもしれない。たまにニュースで報道されるような、全く意味不明な動機から殺人を犯すような異常者と出くわしてしまったのだろうか。もしそうだとしたら、どうすればいいのだろう。何がこの男の神経に触れるのだろうか。もし仮に神経に触れてしまったとしたらどんな目にあうのだろうか。こんな異常者のことだ。きつと猟奇的な末路に違いない。いや、よくよく考えてみると、末路という事は、私は死んでしまうのではないか。いや、当たり前だけれども。そうすると、ニュースにありがちな、被害者の身の上の報道が行われるのではないだろうか。いや、それ以前に警察も私の身边を調べるのではないか。そうすれば、私のペー

コンレタスな趣味が世間にばれてしまうのでは。いや、それだけはダメだ。親にも言っていないのだから。それだけは阻止しなければ――。

あの、聞いていますか？」

えっ？ はい……」

ともかく、わたくし、こういうものでございます」

変質者は一枚の紙切れを差し出した。硬い紙で、なにやら名刺のような体裁をなしている。

天 季節部 干支課 二〇一五年係 歳神 乙未（まことひつじ）』

随分と凝った役作りで……」

随分と……え？」

あつ、い、いえ。なんでもありません。なんでも」

そうですか。では続けますね。まず、二〇一五年の担当である私は本日をもって任を解かれ、地上に滞在する権利を失います。そして、こちらにいる二〇一六年担当の申がその任を引き継ぐ手はずとなっています」

申が敬礼するのを視界の片隅に収めつつ、彼女は胡散臭いような視線を乙未とやらに向ける。いや、胡散臭いのは間違いないのだ。そんな得体のしれないものが存在するはず

がない。もし仮に、靈感のある人だけが見える」とかい類のものだったとしても、生まれてこの方そのようなとは縁のない彼女にそれが見えるはずもない。

「しかしながら、歳神は招かれた家でなければ宿ることができないのです。昔なら、この時期になると、家々が門松を用意して迎えてくれていたお蔭で我々も仕事やしやすかったです。近頃ではどこも門松を出しておいてくれないうのです。特にこの地区はひどく、日没以降ずっと探しているのですが、一軒も……昨年宿った家以外には見つからないのです。規則で同じ家には宿ることができませんから、我々には行き場がないのです」

はあ……」

ですが、我々と言葉を交わせる貴女が現れてくれた。門松というのは我々を歓迎する意を示すものです。したがって、ここで重要なのはその意思。そうしますと、その意思さえ確認できれば、門松を据えるという儀礼的な行為は必要ないのです。畢竟、貴女が申を受け入れると、そう言明してくだされば、問題はすべて解決するのです」

そうですか」

本来は伏すべきことですが、この際ですから教えて差し上げましょう。我々歳神が宿った家には幸福が訪れるのです。これは言い伝えて語られるような気のせいでも済むような曖昧なものではありません。実際に我々天人の権能で、貴女が潜在的に持つ様々な幸福の可能性を一つだけ開花させることが許されているのです」

ものすごく役を作り込んでるなー、などと考えながら、彼女は、蜜を垂らすようにだらだらと続く彼の言葉を、右から左へと聞き流す。

決して場所も施しも求めませんから、どうか申を宿らせてやっていただけませんか」

ああ、はい……………あっ？」

聞き流していたからよく分からないが、今、自分は何事かを尋ねられて肯定しはしなかっただろうか。今の会話はどんなものだったか……………

良かったですね、申。君の住む家が決まりましたよ。いや、本当に良かった」

『良かったですね』？ 君の住む家が決まりましたよ』？ というのはすなわち……………

これで私も安心して、始末書のことを考えずに地上を離れられますよ。ありがとうございます」

ちよっと待って。もしかして今、私の家に宿ることが決定したの？」

はい。貴女が理解のある方で助かりました。今後一年、申をよろしく願いますね」

ちよっ……………」

契約は成立しました。契約が破棄された場合、貴女には祟りが降りかかりますので、ご注意ください」

「……………」

危ない。相手のペースに乗せられるところだった。結局この男はただの痛い変質者なのだ。隙を伺って逃げ出してしまえば問題ない。

それでは、お宅まで案内していただけますか？」

「……………ちよっと待って」

そういつて、彼女はスマホを取り出して、パスワードを入力する。

女の足では、ましてヒールを履いたこの状態では、男の足からは逃げきれないだろう。タクシーを呼んで、うまく

男を締め出して、あとは適当に駅前のネカフェにでも泊まってやり過ごそう。

そう考えて、彼女はタクシーを呼ぼうとスマホを操作する。どうやら最後に使ったときにカメラを起動させたまま電源を切ってしまったらしい。画面には、目の前の光景が映りこんでいる。

あれ？」

どうしました？」

おかしい。目の前の光景と画面に表示された画像が違う。男に画面を見られないように、彼女はほぼ垂直にスマホを持っていく。そうすれば、当然、外カメラに映る光景は、このコスプレ変質者のはずなのだ。

しかし、そこには何も映っていない。いや、何も」というと語弊があるかもしれない。男の映っているべき部分だけ風景がぼやけている。すくなくともそこに男の姿はない。

彼女は外カメラに指がかかるように持ち替えてみる。画面の大部分が暗くなった。どうやら故障ではないらしい。

さらに、少し角度を変えて、画面の中心に木が映るようにしてみる。木は鮮明に映った。

そして再び、男の方へカメラを向ける。やはりその部分だけがぼやけている。

え……あなた、本物だったの……？」

厳冬の冷気が五臓六腑に充満したかのような感覚を覚えた。

本物とは何ですか？」

「いや……その、てっきり……頭のおかしいコスプレ変質者かと……」

「すぶれ変質者……よく分かりませんが、そのように言われたのは初めてです」

それはそうでしょうね」

やはりコスプレのように見えてしまうが、本物だと思っ
て見れば、神秘的な容姿に見えなくもない。素材がいいせ
いか、少なくとも悲惨な仕上がりではない。

本当に怪しい人じゃないのよね？」

ええ、怪しくもなければ人でもありません」

「……分かった。案内する」

およそセールストークなるものは、そこに多少の誇張を含んでいる。理想的な環境では、あるいは理論の上ではそのように機能するかもしれない。しかし、現実では様々な要因によってその理想の働きを示さないという場合がままある。あるいは、その文句が多様な側面のうちのある一面に着目してのみ述べられている可能性もある。その場合、嘘は言っていない。ただ、他の側面が語られていないだけだ。

ちよっと、施しは必要ないんじゃないの？」

それとこれとは話が別です。神は酒でもって迎えるものです」

そんな話聞いてない」

言いませんでしたから。常識だと思っていましたので」

「の……」

引き結んだ口の中で、奥歯にかかる負荷が増大した。

何やらこの神は、先ほどより態度が大きくなっているのではないか。

迎えてくれませんか、申も宿れませんか。そうすると契約を破棄したとみなされ、貴女に祟りが……」

ちっ……」

日々、上から遠慮なく投げられてくる雑務に対してするよりもさらに深い憎しみを込めて、彼女は舌打ちをした。

あ、日本酒がいいです」

台所へ向かう彼女の背中へ、乙未はさらに注文を投げつけた。

今日飲もうと思って買っておいたのに……」

よいではないですか。晩酌にしましょう。私、晩酌というものに慣れていたのでですよ」

凶々しくもグラスを突き出しつつ、彼はそう言った。

地上の皆さんには我々の姿が見えませんが、我々の見ている目の前でおいしそうな食事を家族で囲んで食べたり、おいしそうなものを飲んだりしていて、それはもう、とてもとてもとても羨ましかったのですよ」

それに関して、少しだけ同情する」

ですから、晩酌にしましょう」

……分かったわよ」

彼の押しに負けて、結局酒を注いでやり、自分のグラスにも注ぐ。申が酒瓶のキャップを差し出してきたので、それにも注いでやった。

そうしたら、乾杯をするのですよね」

なんか、目に光が宿ったような……」

彼の茫洋とした瞳が、今では誰が見ても明らかほど活き活きと輝いている。瞼の開き具合が大きくなったから、その分よく瞳に光が入るのだろうか。

乾杯をしましょう。乾杯を」

はいはい」

あまりにも純粋な態度に少しほだされつつ、彼女はグラスをぶつけた。

しまった。爛で飲もうとしていたんだ。などと思いつつ、彼女はグラスを傾けた。

「この一杯のために今年を頑張った気がしますね」

「……ん？ 貴方、今飲んだの？」

少しも中身が減っていないグラスを見て、不審に思った彼女は尋ねた。彼はそれに、手で「待て」と合図し、ちょうど口に含んだおつまみを飲み込んでから答える。

我々は地上のお酒を飲んでも、地上の方と同じようには飲めないのですよ。でも、お酒の中身は飲めていますから問題ありません」

お酒の中身？」

そうです。少しこれを飲んでみてください。水に変わっているはずですよ」

受け取って少し口に含んでみる。確かに、無味無臭のただの水だ。

それ、飲んで美味しいの？ 消毒液で充分じゃない？」

とんでもない。味や香りの感じ方は地上の方と変わりませんから、貴女が感じるのと同じくらいには、美味しく感じているはずですよ」

なるほど……」

あ、次が飲みたいので、これを捨ててきてもよろしいですか？」

どうぞ」

彼女はグラスを傾けつつ、流し台を指差した。

その後も彼と申は、少し口をつけては中身を流しに捨てに行く、という「連」の動作を続けた。

変な飲み会だなあ、などと思いつつ、彼女はグラスを傾け、時におつまみに手を付け、と、単調な動作を繰り返していた。

時計の針は、年の終わりを指し示そうとしている。

今年も終わりますね」

そうね」

では、私はそろそろお暇しますので。どうか一年間、申をよろしくお願いしますね」

ああ、はい……」

それと、特典の幸運の件ですが、今年はどこかで起こりますので、まあ、気長に楽しみにしておいてください」

まあ、期待せずに待っとく」

今日はごちそうさまでした。お蔭で楽しい一年だったように思います」

数時間だけでしょ」

終わり良ければ総て良し、ですよ。それでは」

話しつつ彼と彼女は玄関に到着し、

貴女の二年が幸いに満ちたものとなりますように」

彼は玄関より一歩外に踏み出し、

良いお年を」

その言葉を残して、アパートを後にし、辻の闇へと消えていった。

その夜、人知れず彼女のスマートフォンが光った。通知

画面にラインの通知が数件。母からである。

今日久しぶりにこーちゃんに会……』

覚えてる？ 中学まで「緒だっ……』

今東京で働いてるんだって』

『かもあんたの大学の近くみた……』

しかし、彼女がそれを見るのは翌朝のことである。